077062-000-3

811.56-M897kh

かなづかひ教科書

物集　高見／著

M24

DAC-0246

帝國文科大學教授物集高見先生著

かなづかひ教科書

全

東京書肆　十一堂發兌

国立国会図書館
245097

811.56M897 四一

かなづかひ教科書

例言

一 此書ハ、余が、東京大學、および、東京師範學校等にて、自ら教へたる、かなづかひの、書取なるが、此度、また、華族女學校にも用ひらるとて、勸めらるゝまゝに、かくハ、上木せしなり。

一 此書により、此式をもちふる時ハ、清音、濁音、音便の、三種のかなづかひハ、大抵、十二時間、乃至、十五時間をもて、全く教へ得べし。

一 生徒の試驗にハ、余ハ、常に、種々の、漢字を與へて、傍訓を附しめ、或ハ、假字違ひの、歌文を與へて、其正誤を附しめたり。

一書中、くるゐ（烏芋）ずるえ（條）などの如く、一語にて、ゐの部にも、ゑの部にも、出すべき類ハ、最初の、部にのみ出して、別々にも出さず。

一書中、（　）を、かけらることぞハ、古言まさハ、古言のたぐひにて、今ハ、やうなきものなり。

一書中、あるう（周章）を、出せるうへに、さらに、其下に、あるたぐし（惶遽）を出せるハ、いかにも、無益の、やうなれども、かゆうの語ハ、假字も同様なりといふを、知らしむるにも、きはめてよき、便利ともなれば、いざしつ。

明治十八年十二月

かなづかひ教科書

豐後　物集高見　著

とりすべての、ことども、

國語ハ、音をつゞる、ものにて、假字ハ、音をしるして、ゆくものなり。されば、其假字を、正さんとするにも、先づ、其もとの音より、正さゞるべからず。さるに、本邦人ハ、昔より、其思想をいふに、漢語をまじへ、國語をしるすに、漢字を、もちひ来しかば、今ハ、象形文字の、目にみるに、馴れたるほどハ、記標文字の、耳に聞くにも、うとくなりつゝ、すでに、殆と、千餘年をへたりき。されば、今たちま

ちに其馴れたる、漢語をやめ、漢字をすてゝ、其やうとくなりたる、國語と、假字とのみにも、することあたはず。されば、先づ、其音の、あやまれるをおきて、其假字より、正さんとも、すなりさて、其國語の數をかぞへバ、少なくとも、五萬ばかりも、あるべからんに、其國語の、假字どもを、ひとつぐに覺ゆるハ、たゞやすかるべき、事にもあらねば、別に、覺えやすかるべき、一種の手段を、設けざるべからず。こゝに、先輩の、考へたる、一種の、法あり。其法、二つの、紛るべき假字を、取り出で、其一つハ、おぼえて、一つハ推し量る法なり。抑も、假字の、紛るといふハ、よく相似たる、音どもの、二つあるによれり。されば、其二つの、よく似たる音につきて、其多きと、少なきとを較べ、まづ、一つの、少なき方をば、よく覺えてさて、今、一つの、多き方のハ、未だおぼえざる、假字なりと、おぼゆる法なり。例へば、いの假字を、書くべきは、二百五十にして、ゐの假字を、書くべきハ、十七なれバ、ゐの、いより、少なきこと、十分の、一にも至らざる、割合なり。然る時ハ、其少なき、ゐの方のをば、おぼえおきて、其他のハ、おぼえおらざる、方のなれば、かならず、いの假字なりと、推しはかり知る、類の如し。

かなづかひの、ことかち。

假字づかひをことかたバ、清音の假字、濁音の假字、音便の假字、字音の假字の、四種にことかつべし。其うち、字音の假字ハ、其數、少な

からねむ、用ふべき節々よ、考がへ見て、馴れておぼゆるを、よしとすべし。なほ、字音の假字ハ、字音かなづかひ教科書を見るべきなり。さて、假字の、約るべきハ、約るべき、清音の、阿行、也行、和行、波行と、濁音の、佐行、多行とまて、次の如し。

清音まて約るべき、假字。但し、○をめぐらすハ、全く約れぬ、假字なり。

阿行　あ　い　う　え　お

也行　や　ゆ　よ

和行　わ　ゐ　ゑ　を

波行　は　ひ　ふ　へ　ほ

但し、此うちまて、阿行、也行、和行ハ、もよ、喉音なれバ、其韵、やをらかまて、約れ易けれども、あ、や、わ

ハ、もひよ、約るることなく、もよ、よも、約ることなし。也行のゆ、和行の字ハ、古より、阿行の、い、いと、區別を、立そぐれバまよ、約ることなし。波行ハ、詞の、上よありてハ、約れずして、中と下とよ、ある時、阿行、也行、和行のよ、約ることあり。

濁音まて約るべき假字。但し、○をめぐらしたるハ、全くまぎれぬ、假字なり。

佐行　ざ　じ　ず　ぜ　ぞ

多行　だ　ぢ　づ　で　ど

おぼゆべき、假字

假字の約るべきハ、上よりくる、如くなれど、其すくなき方、即ち

おぼえおくべき、假字のうち、清音の、和行より、次第にいふべし。

○清音の假字

[ヱ] この假字ハ、ヱ(綿)、ヱラ(笑)ふ、などの如く、語の上に、ある時ハ、まぎるゝことなく、あるゝ(周章)、あゑ(泡)、などの如く、中と、下とに、ある時ハ、ゑにまぎるゝこと、あり。あゑゝ あゑとも、ゑ としてハ、書くべし。されバ、こゝまた、中と、下とに、ありて、ヱと書くべき、かぎりを出ざせり。此ほかのハ、皆ゑと書くべしと、ヱきまふべし。

あるとろ　周章、おどろき さるぐ。字鏡(惶急、阿和豆)　あるたゞし、惶遽、假字おなじ。

いるけなし　稚、いとけなし、をさなし。此假字、日本紀に驚駭を、いるくとよめるに、ゞる。

いるし　鰯、魚の名。和名抄(鰯、伊和志)

うるる　植、草木、うゑ こゝるごとく、たゆ。風俗歌(宇和流)うゑ(植)といふ語ハ、和行の、たゝらきまて、うゑとも、いたるゝ如く、まゝ、うるるとも、いたる。まゝすべてうゑうゑなどの、ゑへハ、詞の、中にあるか、他の、語の上に、かきなる時ハ、ヱ、ゑ、にかゑる、例なり。たとへバ、すゑ(居)を、すゑるといひ、こゑづかひ(声遣)を、こゑづかひといひ、うくづみ(上包)を、うゑづみといふ、類の如し。

かるく　乾、しめりけ、うす。字鏡(燥、可和久)　かるらか、燥、かるく、こゝろ、假字おなじ。

こるゐ　烏芋、草の名。和名抄(烏芋、久和為)

さるぐ　騷、うごきみぐる。万葉集(佐和久)　さるがし、騷、假字おなじ。

さるやか　爽、たれやか、日本紀私記(左和也加)　さるやぐ、爽　さるぐろ、爽、さるやかになる。假字おなじ。

するる　居、坐、うごかずして、をる。すう(居)といふ語の、たゝらき。うるるの下、見るべし。

ずゑえ

條、木の枝の、すぐゝのびたる、もの。此假字、古書に見えず。延喜式のも、たしかならねば、今ハ、本居翁の、ずゑえ（末枝）ならんといへるに、よる。

たるむ

撓、おりりをうけて、下にむく。字鏡（剞、多和牟）たる、撓、たるたる、撓々、たるゝ、撓々、たるむこゝろ。萬葉集（多和多和）

たるやか

嬋妍、たるゝとして、やすらかにみゆるさま。假字ハ、次の、たるやめに、なずらふべし。たるやめ、美女、たるやかなる、女。萬葉集（多和也女）

たるゝら

俵、米などをいるゝ、はらづと。此假字、古書にみえず。今ハ、高田與清の、松屋筆記の、説による。

ゆるゝう

硫黄、火をもやすもの。ゆのあるの約り、和名抄（流黄、由王）

よるゝし

弱、つよくなし。字鏡（縢、於毛與和志）かよるし、弱、よるしに、おなじ。よるゝる、弱、よるくなる。假字おなじ。

あるゝ

泡、沫、水のふくれたる、もの。古事記（阿和）あるしほ、白塩、あるのごとく、かろき志ほ。和名抄（白塩、阿和之保）あるゆき、沫雪、あるのごとく、きえやすき、ゆき。古事記（阿和由岐）みなるゝ、水泡、みのあるの約り。水ハ、たゞ、みゝ（水上）のごとし。をゝ、みのあるの、つゞまり。みを（水脉）みなかハ、のあの、つゞまり。

あるゝ

皺、皮の、縮みたるもの。和名抄（皺、之和）あるむ、皺、いでく。字鏡（酢、於毛豆志和牟）

ひるゝ

鰯、鳥の名。この假字、古書に、みえず。されど、山家集に、此鳥の、歌ありて、常に、かくかきならへり。文字も、鰯の字に似たれバ、此假字なるべし。

（みるゝ）

酒瓮、酒をもる、かめ。日本紀（瀰和）

次のハ、ほかの語と、結びあひたる、語なれど、結びを、ときて見れバ、語義あらはれて、其假字も、知らるめれども、語義を、知らざ

245097

る時ハ、書くことも、讀むことも、いできぬことゝなり。今ハ、ひとつの、語のやうにも、なりたるが、あれゝだ、いづせり。

うらゑ　浦回、浦のめぐり。浦のほとり。すべて、物しまゑ
のかたみめぐれるを、ゑといふ。
嶋回、嶋のめぐり。嶋のほとり。

おほゑ　輞、車のそとがたの、大きなる、輪。大輪の、こゝろ。和名抄（輞、於保和）

くつゑ　轡、馬の口にはむる、もの。口輪のこゝろ。和名抄（轡、久豆和）

くるゑ　廓、ひとかまへの、ところ。此假字、古書にみえず。されど、うらゑの所にいへる如く、かたみめぐりて、くるゑと、かぐかなるを、ゑといへれど、くるゑハ、かならず、この假字なるべし。

ことゑざ　諺、ことの、ゑざ。ことくさ。
霊異記（去砥和左）

ことゑり　理、ことの、すぢ。ことのゑかち。萬葉集（許等和利）

こゑね　聲音、こゑね。こゑの志ハ、うゑるのところに、いへる如く、ほかの、語の上に、かさなる時ハ、ゑとかはる、例なり。こゑざま、聲様、こゑざま。こゑぐえ、聲絶、こゑだえ。こゑだか、聲高、こゑだか。こゑづかひ、聲遣、こゑづかひ。

こゑづくり、聲作、咳嗽、こゑづくり。しはぶき。字鏡（欬、巳和豆久利）こゑ

ひゞき、聲響、こゑひゞき。こゑぶり、聲風、こゑぶり。

しゑざ　作業、するゑざ。

のゑき　野分、秋の頃、の、大風。野を、ふきごくる、こゝろ。和名抄（暴風、乃和支）と、あれとも、なゞ、暴風にも、あらず。秋の頃にふく、暴風なり。

たらゑ　腸、腹のゑ。和名抄（腸、波良和太）

ゐ　この假字ハ、ゐ、ゐ、（豕井）などの如く、一音の、語なる時、あるも、ゐき（臀）

らひ、ゐざる、などの如く、語の上に、ある時ハ、いにまぎれ、いとも、いさらひとも、ふまゐる、あぢさゐ、などの如く、中と下ととしてハ、かくべし。まゐる、あぢさゐ、などの如く、中と下とに、ある時ハ、いとひとに、まぎるゝことあり。まゐるとも、あぢさひとも、ふとしてハ、かくべし。されバ、こゝにも、一音の語と、中と、下とに、ありて、ゐとかくべき、かぎりを、いづせり。いと、かくべきハ、次にいづせれど、其ほかのハ、みな、ひとかくべし、とゝきゝふべし。

膝行

ゐ

豕、猪、獸の名。和名抄（彘、井）亥、十二支の中の、もの、假字なるし。ゐのこ、豕、豕の子の、こゝろ。日本紀（偉能古）ゐのしし、猪、猪のししのこゝろ。

ゐ

井、田にひく水を、たゝへ、こゝろ。水をくみとる、こゝろ。和名抄（井、為）ゐぜき、堰埭、田にひく水を、せきこゝろ、こゝろ。和名抄（堰埭、為世木）ゐぞ、堰埭、ゐぜきに、ちなじし。

ゐぐひ 堰橛、ゐぜきのくひ。古事記（韋具比）ゐなか、田舍、井中のこゝろにて、井と、井との、間にある、人家。和名抄（田舍、井奈加）たなゐ、田の井なり。のも、なともいへり。みなかみの、例のごとし。いさらゐ、小井、いさゝかなる、井。いたゐ、板井、板にてかこひたる、井。（かなづなゐ）桔槔、鐵索の井なり。今の、むねつるべ。和名抄（桔槔、加奈豆奈為）

ゐ

（ゐさらひ）

ゐざる

藺、草の名。和名抄（藺、為）おほゐ、莞草の名。大きなる、藺、和名抄（莞、於保為）

臀、しり。すゑる時、しゝにつく、ところ。和名抄（臀、為佐良比）

膝行、ひざをつきて、行く。すゑりながら、すりて行く。此假字、古書にみえず。今ハ、古言梯により、まゝ、次の、ゐざりの、例によれり。ゐざりハ、犂の、下につけて、すりてつかふ、道具なれバこゝろ同じ。（ゐざり）耒底、田をすく、道具。犂の、下につくる、もの。和名抄（耒底、為佐利）

ゐもり

ゐや

ゐる

ゐる

蜎、虫の名。字鏡（蜎、為毛利）

禮、うやまひ。假字ハ、次の、ゐやびの例なり。（ゐやび）禮、うやまひ。續日本紀（為夜備）

ゐやまふ、禮、うやまふ。假字おなじ。

率、つれて行く。假字ハ、次の、ひきゐるの例なり。ひきゐる、引率、ひきつれて、ゆく。字鏡（携、比支為天由久）

居、坐、をる。すゑる。和名抄（艘、為流）ゐ、居、坐をり。いへゐ、家居、家をしてをる、と＝ころ。かりゐ、鴨居、戸の、かみのしきみの上。くもゐ、雲居、雲のをる、とこ＝ろ。古事記（久毛韋）くらゐ、位、坐を、くら＝をる、とこ＝ろ。和名抄（位、久良為）

とのゐ、宿直、殿にゐる、こころ。とうゐ、神門、鳥ゐる、こころ。和名抄（神門、鳥居）

まとゐ、圓居、まとかにをる。車坐にをる、こころ。神樂歌（万刀為）もとゐ、基、本の、すゑ

まゐる

あぢさゐ

ある

うなゐ

かくゐ

參、貴きところに、行く。神樂歌（万為利）

紫陽花、草の名。字鏡（紫陽花、安治佐為）

藍、草の名。和名抄（藍、阿為）からあゐ、紅、べになり。唐の藍の、こころ。くれ＝なゐ、紅、べになり。呉の藍の、こころ。のあを、つゞ＝むれバ、なゐとなる。和名抄呉藍久礼乃阿為）

萬葉集（久禮奈為）

髫髮、髮を、うち垂れたる、ちぐ。まゝを＝さなりき、ひと。和名抄（髫髮、宇奈為）うなゐ、童男童女、うなゐ＝ゐに、おなじ。うなゐまつ、馬鬣松、塚の上に、うゑて、なきひとの、しるしとしたる松。假字、おなじ。

乞兒、くひものを、ひとにもらふ人。和名抄（乞兒、加多為）

（志ほさゐ）　海の潮の、立ち騷ぐ、ところ。萬葉集（潮佐為）

なゐ　地震、大地の、うごき。日本紀（那為）

此ほかに、用の字の語尾を、ゐなりとして、もちゐ、もちゐる、もちゐれと、ゐらかす、説あり。されども、其假字のあかし、古書に見えず。今ハ、本居翁の、古事記傳によりて、ゐの説を、用ひず。但し、古事記傳に、よれりとハ、其ゐをとらざるに、よれるなり。なほ用字の事ハ、日本辞典にいへり。

い

此假字ハ、一音の語なる時、あるを、語の上に、ある時ハ、ゐにまぎる。されど、二に、いへる如く、ゐと、かくべき者を、覺えおきて其外のを、みないなりと、覺ゆべし。また、中と下とに、ある時を、ゐと、ひとにまぎる。されど、ことなれ、中と下とにありて、いとかくべき限りをいぐせり。おとかくべきを、二に、いぐせり。其外のを、みな、びとかくべしとときまふべし。

（おいかけ）　緌、冠に、つけたる、緒。和名抄（緌、於以加計）

さいづち　柊楔、こだくみの、道具。木にてつくれる、槌。和名抄（柊楔、散伊都遲）

（のいづみ）　肉刺、沓にすられたる、きず。くつずれ。和名抄（肉刺、乃以須美）

かい　櫂、船の道具。和名抄（櫂加伊）

（かい）　蚘、虫の名。字鏡（蚘、加伊）

此ほかに、猶、いとかくべきハ、也行の上二段、すなはち、ゆいゆるゆれとなるらくべき、ことばの働きなり。これ其ことばをぶに、也行の上二段と、知る時を、いと、書くべきハ、自ら知らるべき、ことなりなれども、今ハ、ちなみに、其こと

ぞどもをも、次にいぶせり。

悔ゆ。くや。みる　くゆ。のちのくゆ。（後悔）のたぐひ。

報ゆ。こたへをす。　むくゆ。ものの（應報）のたぐひ。

老ゆ。よはひかさなる。　おゆ。おゆびと（老人）のたぐひ。

う

この假字ハ、うめ（梅）、うを（魚）、などの如く、語の上に、ある時ハ、まぎらしことなく、すう（居）る、すう（居）などの如く、中と、下とに、ある時ハ、ふと、ゆとに、まぎるゝこと、あり。すゆるとも、すゆとも、ふとしてハ、かくべし。されど、こゝにも、中と、下とに、ありて、うとかくべき、かぎりをいぶせり。ゆとかくべきハ、五にいぶせり。其ほかのハ、みな、ふとかくべしと、辨ふべし。

（せう）兄鷹、ちひさき鷹をいふ。但しこれ、小の、字の音にや。和名抄（兄鷹、勢宇）

此ほかに、猶、うとかくべきハ、阿行、和行の下二段、すなはち、うえうるうれ、うゑうるうれと、たゞらくべき、つぎことばの働きと、音便となり。音便にて、うとかくべきハ、音便のところ、十二にいぶせり。其つぎことばのハ、阿行、和行の、下二段とぶに、知る時ハうと、書くべきハ、自ら知らるべき、ことわりなれども、今ハ、ちなみに、其ことばどもをも、次にいぶせり。

得（う）　ぷる　ぷれ

飢（う）う。　うぷる　うぷれ

植（う）う。　うぷる　うぷれ

坐（す）う。　すぷる　すぷれ

ゆ

ゆの假字ハ、ゆめ（夢）、ゆき（雪）などの如く、語の上よ、ある時ハ、まぎ（蹴）れ（く）。

ゐ　くゐる　くゐれ

ゐる〳〵ことなく、おゆる（老）、くゆ（悔）などの如く、中と、下とよ、ある時ハ、ふゐ、うゐなどの如く、まぎ〳〵ることあり。ちふるとも、くうるとも、みこしてハ、かくべし。さ〳〵れど、中と、下とよ、あうて、ゆと書くべきハ、也行の、上二段、下二段すなもち、ゆいゆる〳〵ゆれ、ゆえゆるゆれと、そ〳〵らくべき、ゆゑごこゝでの働きと、音便となれど、うぎごこゝのハ、其を〳〵らきを、也行の、上二段、下二段とぞよ、知る時ハゆと書くべきハ、自ら知らるべき、こゝうなれども、なほいと上の、三と七との、末よ出ぶる、ゆと書ける物、それな

り。此うちまでも、三のハ、ことよ、誤ることあり。まゐ、音便うて、ゆと書くべきハ、下の、十三よりぞせり。

ゑ

この假字ハ、餌（繪）ゑ、ゑに（槐）ずなどの如く、一音の、語なる時、あるえ、ゑく（瞼）し、ゑにずなどの如く、語の上よ、ある時ハ、えまぎれ、えも初〳〵しくも、ふゐし〳〵聲ぐし。くゑ（未）ず、なゐなどの如く、下よ、ある時ハ、中よありて、書くべし。えとかくべし。えとへと、紛ら〳〵ことあり。こえ〳〵とも、ふとゝえハ、かき語いなし。えとへとハ、かくべし。されゑ〳〵ゑえ一音の語と、下よありて、ゑとかくべき、限りとを出せり。えとかくべきハ、次よいぞせれバ、其ほかのハ、皆〳〵とかくべし。と、辨ふべし。

ゑ

餌（魚鳥などを飼ふときくひもの。和名抄（餌、恵））ゑとり（屠児、恵刀利）ゑぶくろ、餌袋、餌をもりとるふくろ。

ゑ

繪、物の形を書きあらはしとる、もの。呉音の、繪字の假字。ゑあはせ、繪合、繪をたゝかはする、たはぶれ。ゑかき、画工、繪をよくかくひと。ゑどる、綵、繪に色をくまどる。ゑま、繪馬、神社にたてまつる、馬の繪の額。ゑのぐ、繪具、繪をいろどる、もの。

ともゑ、鞆繪、鞆にかきとる、繪。

ゑ

穢、けがれ、呉音の、穢字の假字。ゑさ、穢多、けがれおほき、ひと。ゑとり、の、つゞまりなりといつり。ゑど、穢土、浄土にむかへて、人世をいへる佛語。(ゑど)糞くそ。

ゑぐし

(ゑにず)ゑんず ゑんじゆ

(ゑぬ)

ゑふ

酸、灰汁の、あぢはひ。和名抄(酸、恵久之)

槐、木の名。字鏡(恵尓須)

狗、獣の名。和名抄(狗、恵奴)

醉、酒の氣に、あてらる古事記(恵比)

ゑぼし

ゑむ

烏帽子、頭にかぶるもの、呉音の、烏字の假字。

咲、にこかやに、こらふ。古事記(恵美)

ゑくぼ、靨、ゑむ時の、頰のくぼみ。和名抄(靨、恵久保)

ゑまし、(ゑまたし)可咲、ゑむべし。ゑむさまに見ゆ。假字、おなじ。

(ゑづらか)笑ひあざける、さま。靈異記(恵都良可)(ゑらぐ)歡笑、こらひたのしむ。續日本紀(恵良伎)(ゑる)ゑらぐに、おなじ。字鏡(嘲恵留)

ゑんず

ゑんぞ

怨、うらむ。うらみを、いふ。怨の、字音の假字。

ゑる

蜻蛉、虫の名。和名抄(赤卒、阿加恵無婆)

こゑ

雕、刀を、つきこみて、ほる。佛足石歌(恵利)

ゑぐる、刳、ゑりくる、假字おなじ。

すゑ

聲、口よりいづる、音。また、物のひゞき。萬葉集(許恵)

末、物のうら。ものの、さき。古事記(須恵)

こずゑ、梢、木の末和名抄(梢、古須恵)

（すゑ）
すゑ
ちゑ
つくゑ
つゑ
ゆゑ

假髮 髮の、おぎなひにそふる、かみのけ。和名抄（假髮、須惠）
陶 土燒の、うつは。假字ハ、次のすゑものの例なり。 すゑもの 陶、土燒のうつは。和名抄（陶、須惠毛乃）
智惠 心の、さとり。心の、えらさ。ゑハ吳音の、慧字の假字。
机 書籍などをのする、もの。和名抄（机、都久惠） ふづくゑ 机、ふみの机。假字おなじ。
杖 足のたすけにつく、もの。和名抄（杖、都惠） かせづゑ 撞首杖、撞木をつけたる杖。和名抄（撞首杖、加勢都惠）
故 事のもと、また、その為、それにより、の意。古事記（由惠） ゆゑづく ゆゑありげに見ゆ。ゆゑゆゑし、ゆゑづきて見ゆ。假字おなじ。

此ほかに、猶、ゑとかくべきハ、和行の下二段、すゑ〳〵すう‖うる‖うれ‖と、はたらくべき、ことばの働きなり。此ハ、其ことばをだに、和行の下二段と知る時ハ、ゑと書くべきハ、自ら知らるべきことなれども、今ハ、ちなみに、其ことばどもを、次にいだせり。

飢う 腹にくひもの なし。 うゑ うゑじに（餓死）のたぐひ。
植う 草木を、おほしたつ。 うゑ うゑき（植木）のたぐひ。
坐う すゑらする。をらす。 すゑ いしずゑ（柱礎）のたぐひ。
（蹴う） 足にて、とばす。ける。 くゑ くゑまり（蹴鞠）のたぐひ。

え この假字ハ一音の、語なる時、あるも、語の、上にある時ハ、ゑ‖にまぎる。されば、四にいへる如くゑとかくべきものを、お

ぼえおきて、其ほかのハ、皆、え。なりと、おぼゆべし。まさ、中と、下とは、ある時ハ、ゑ〓と、へ〓とは、まぎる。されど、こゝにも、中と、下とは、ありて、え。とかくべき、かぎりをいごせり。ゑ〓とかくべきハ、六はいごせり。そのほかのハ、みな、へ〓とかくべしと、こきまふべし。

(あえか) かよこく、ものやもらか、の意。中古の語にて、かく、書きならへり。

すえる 餧、食ひもの、酸くなる。此假字、日本紀の傍訓による。されども、和名抄にも、冷酢漿の注に、冷酢を、比伊須由礼流とよみて、須由礼流を酸くなれる意にいへれバ、餧ハ、ともに、也行にて、すえるとも、すゆるとも、いへるなり。

(あこえ) 距、雞の、けづめ。和名抄(距、阿古江)

(さしえ) 小筒、酒をいるゝ、筒。東鑑に見ゆ。さしずえの、うつりしなるべし。

さじえ 榮螺、貝の名。和名抄(榮螺子、佐左衣)

さすえ 棬、盃の、たぐひ。和名抄(棬、佐須衣)

ぬえ 鵺、鳥の名。和名抄(鵺、沼江)

たえ 鮠、魚の名。字鏡(鮠、波延)

ひえ 蕀、草の名。和名抄(蕀、比衣)

ふえ 笛、吹きならす、もの。和名抄(笛、布江)

ひえどり、鵯、鳥の名。蕀をくふ、鳥なるべし。和名抄(鵯、比衣、土里)

のどぶえ、吭、のど。和名抄(吭乃無土布衣)

次のハ、ほかの語と、結びあひたる、語なれど、結びを、ときて見れバ、語義あらはれて、其假字も、知らるめれども、今ハ、ひとつの、語のやうにも、なりたるがあれバ、いごせり。

いりえ　入江、陸の方へ、入りこみたる、江。

かもえ　鴨柄、今の、かもゐのことにや。和名抄（鴨柄　加毛衣）

きのえ　甲、十干のうちの、もの木の兄、の意。十干は、木火土金水の、五行を、木の兄弟、火の兄弟とやうに、二つづゝに、こけたるなり。

しづえ　下枝、下の枝。古事記（志豆延）

ながえ　轅、車の、前に出でたる、柄。長柄の、こゝろ。和名抄（轅、奈加衣）

ひこばえ　蘖、木の、きりかぶよりはゆる、もの。孫生めこゝろ。和名抄（蘖、比古波衣）

もえぎ　緑、草木の芽の、もえいでたる、色。萠黄の、こゝろ。

此ほかに、猶、ゑとかくべきは也行の下二段、すなはち、ゆえゆるゆれと、はたらくべき、ことばことばの働きなり。此は、其ことばをぐに、阿行、也行の、下二段と知る時は、ゑと、書くべきは、自ら知らるべき、ことはりなれども、今は、ちなみに、其ちかく、用ふべきどもをば、次にいぐせり。

（肖ゆ。）似る。

得（ゑ）　こがものに、す。

覺ゆ。（おぼ）　忘れずて、あり。

聞ゆ。（きこ）　耳の心に、知る。

越ゆ。（こ）　經てゆく。

榮ゆ。（さか）　盛りに、なる。

絶ゆ。（た）　つぐき、切る。

（あえ）　あえもの（肖物）の、たぐひ。

え　こゝろえ（心得）の、たぐひ。

おぼえ。　ものおぼえ（物覺）の、たぐひ。

きこえ　よそのきこえ（外聞）の、たぐひ。

こえ　やまごえ（山越）の、たぐひ。

さかえ。　くにのさかえ（國榮）の、たぐひ。

たえ　とだえ（跡絶）の、たぐひ。

費ゆ。（つひ）少なくなる。つる。　つひえ。くにの、つひえ。（國費）の、たぐひ。

煮ゆ。（に）煮るもの。としのふ。　にえ。にえゆ（沸湯）のたぐひ。

生ゆ。（な）草木、おひいづ。　なえ。ひこばえ（蘖）の、たぐひ。

映ゆ。（な）光り、てりあふ。よくうつる。　なえ。ゆふばえ（夕照）の、たぐひ。

見ゆ。（み）目の心に、知る。　みえ。みえがくれ（見隠）のたぐひ。

燃ゆ。（も）火、おこる。　もえ。もえぐひ（燼）の、たぐひ。

萌ゆ。（も）草木の芽、いづ。　もえ。もえぎ（萌黄）の、たぐひ。

を

この假字ハ、を、を、（男尾）などの如く、一音の語なる時、或は、を（女）うな、をか（岡）、などの如く、語の上に、ある時ハ、おに紛れ、おとも、おうなとも、ふとしてハ、書くべし。あをひえ（竹刀）、あを（青）、などの如く、中と、下とに、ある時ハ、おと、ほとに、紛るゝこと、あり。かつおむしとも、あほとも、ふとしてハ書くべし。但し、國語にてハ、中と下とに、おと書くべき、語なければ、ひとつ（ちおも）といふ、語あれども、此ハ、乳母の義にて、ひとつの、語にはあらず。母を、古言にてハ、おもともいへり。中と、下とにてハ、唯、ほにのみ紛ふと、思ふべく、さて、こゝにはを、と書くべき、限りを出せば、おと、ほとハ、例の、推して知るべし。

を

男、人のみならず。鳥獸草木にも、通はしていふ。此假字、次の、をのこ、をうと、などの例に、よる。

をのこ、男、和名抄（男、乎乃古）をうと、夫、つまと志こる、男。をひと（男人）の、音便なり。和名抄（夫、乎宇止）をとこ、夫、男、つまと志こる、男。すべて女にむかへて、いふ時の、ことも。和名抄（夫、乎止古）をのこご、男児、をのこ、の児。（うはを）後夫、のちの、夫、和名抄（後夫、宇波乎）さつを、獵師がりをする、男。萬葉集（佐都雄）たけを、

を

壮士、たけき、男。あらし、壮士、あらゝしき、男。萬葉集（安良志乎）

葉集（多家乎）

たやりを、すゝみよすゝむ、男。假字、おなじ。**みやびを**、風流士、みやび、なる、男。

まますらを、丈夫、ますらをしき、男。萬葉集（萬須良乎）**をゞか**、牡鹿、をゞの鹿。さをしかも、おなじ。**さを**、さをしかの、略。**をて**、義なし。

たゞひを。すゞてたゞひ。和名抄（絃、古止乃乎）**みを**、緒、糸、索、紐、のたぐひ。和名抄（紘、古止乃乎）**つゞけを**、水脉、みづすぢの、長くつゞくをいふ。**みをつくし**、澪標、みをの、あるしるしする、みぢ。萬葉集（美乎）**みをの**、舟のゆきゝ、すぢ。萬葉集（水乎都久志）**ほぞのを**、臍の、あるしるし。**帯**

ちごの、臍よ。

つきうる、緒。

苧、糸よりむ料の、麻。

和名抄（麻、乎）

をけ、桶、麻をうみて入る、器。水などを、入る、器。麻笥の意。和名抄（桶、乎計）

を　を　を

尾、鳥獣の、あり、ひけの、なが毛。和名抄（尾、乎）**をゞな**、尾花、尾の如き花。薄の穂をいふ。萬葉集（乎波奈）

峯、山の峰。萬葉集よ、峰字を、乎とよめり。また、山の裾の、長くひきゝる、ところをもいふ。古今集（やまぢのぬれば、山がすみ、みねよりたちて、をぬにこそ、ゆふべは、かへれ）

のく、岑上、をのうへ、まり。假字もあるなじ。

小ちひさき物を、いひ、また、小車、ちひさきすゞ、輕くそこんでいふ、つけことば。**をぐるま**、小車、ちひさき車。**をぐし**、小櫛、ちひさき、櫛。**をす**、小簾、簾、ちひさきすだれ、また、唯、簾をいふ。

唯、くゝの、聲。次の、**を**、をの例たり。**を**、唯々、くゝの聲。日本紀の古訓によると。

をを、警蹕の聲。假字、おなじ。

をうなご、女、をうなよ、女をみなよ、なぶりてもいふ。假字を、をみなご、女、をうなよ、おなじ。

をみな、女、古事記（袁美那）をんな、女、をみなの、音便。をんなご、女、をうなに、おなじ。をんなめ、妾、妻のごとくする、女。和名抄（妾、乎無奈女）

をか　岡、陸、低き山の、平かなる、ところ。海ならぬ、ところ。和名抄（兵乎加）

をかし　可笑、をこがましく、みゆ。笑ひつべし。字鏡（可咲、阿奈乎加之）○此をかしを、おかし（可怜）と、別ちなく、用ふる人、あり。されども、おかしハ、憐に、おもしろきをいふ、語なれバ、をかしの、笑ひつべきといふ、ひとつに、すべからず。されバ、今ハ、本居翁の説によりて、おをの、假字をつかへり。

をかす　犯、しひて、す。此假字古書にみえず。今ハ、古言梯の説による。

をかつこじ　茵芋、木の名。ひとつの、躑躅。和名抄（茵芋乎加豆々之）

をがむ　拜、禮をす。假字ハ、次の、をろがむの例なり。（をろがむ）拜禮をす。日本紀（烏呂餓弥）

をぎ　荻、草の名。和名抄（荻、乎木）

（をく）　招、まねく。よぶ古事記（遠岐）

（をぐな）　童男、男の、こどもを。日本紀（烏具奈）

（をけら）　朮、草の名。和名抄（朮、乎介良）

をこ　愚戯、おろか。たはぶれ。古事記（袁許）をこがまし、をこに見ゆ。をこ

がる　をこに、思ふ。をこめく、をこに見ゆ。

をこじ　艤、魚の名。和名抄（艤魚、乎古之）

をこたる　怠、愈、心、ゆるぶ。病、いゆ。此假字古書にみえず。今ハ、字鏡集の、古訓による。

をごる　驕、奢、たかぶる。たかぶりとる、こざをす。此假字古書にみえず。今ハ、本居翁の、をこといふ語の、うつれるなり、といへるによる。

をさ　長、かみにたつ、人。萬葉集（乎佐）さとをさ、里長、里のをさ。むらをさ、邑長

をさ

（をさ）

をぐし

をさなし

をさむ

をさをさ

をさをさし

をし

をし

邑のをさ。ふなをさ、船長、船のをさ。

筬、機の、道具和名抄（筬、乎佐）

譯語、外國の語を、こが國語に移し、こが國語を外國の語に移す、人。日本紀の、古訓による。

鮫、魚の、串にさしたる、りの。和名抄（鮫、乎佐之）

幼稚、いとけなし。こかし。日本紀、不賢の、古訓による。をさなご、幼兒。をさなき兒。

治、納、靜にす。物を、入るべき所に入る。萬葉集（乎佐牟）をさまる、治、納、假字、同じ。餘りにも、多くへのころ。萬葉集（乎佐乎佐）かしこし。かしこし。日本紀、軌制の、古訓による。

鴛鴦、鳥の名。和名抄（鴛鴦、乎之）

愛、惜、すてがたし。古事記（乎志）

をしかた

をしき

をしふ

（をす）

をそ

（をそ）

をたけび

をち

をぢ

韋、なめしたる、皮。和名抄（韋、乎之加波）

折敷、かたらけなどを、のせるもの。折り敷きの、つぐまり。

教、物のおしへ。日本紀、竟宴歌（袁志弊）をしへご、弟子、こがをしふる、人。

食、くふ。古事記（袁須）（をしもの）食物、假字、おなじ。

獺、獸の名。和名抄（獺、乎曾）

虛言、偽り。そらごと。萬葉集（乎曾）

雄詰、をしき、たけび。日本紀（烏多鷄盧）

遠、とほし。とほきところ。かなた。日本紀（烏智）をちかた、遠方、とほき方。をちこち、遠近、あなた。こなた。

伯父、叔父、父の兄弟。和名抄（伯父、乎知）（えをぢ）伯父、父の兄。字鏡（阿伯、衣乎

地）（おとをぢ）叔父父の弟。字鏡（阿叔、弟乎地）おほをぢ、従祖父父の、をぢ。和名抄（従祖父、於保乎知）

をぢ

老翁、年おいたる男の尊称。日本紀（老翁、烏膩）

（をぢなし）

懦弱、つたなし。しりとし。佛足石歌（乎遲奈伎）始めは、もどる。もとは、もどる。萬葉集（乎知）をちかへる、をちて、かへる。假字同じ。

（をつ）

（をつゝ）

現在、うつゝ。萬葉集（乎都々）

をとつひ

一昨日、昨日の、昨日。萬葉集（乎登都日）をとゞし、一昨年、昨年の昨年。

をとめ

少女、若きむすめ。古事記（遠登賣）

をとり

媒鳥、鳥をとる時、なかだちにつかふ、鳥。和名抄（媒鳥、乎度利）

をどる

踊、とびあがる。まふ。字鏡（踉蹡、乎止留）

をの

斧、木をきる、刀。和名抄（斧、乎能）てをの、釿。木をけづる、斧。和名抄（釿、天乎乃）

をのく

戦慄、おそれふるふ。字鏡（惜、乎乃々久）

をば

伯母、叔母、父の姉。父の妹。和名抄（伯母、乎波）

をはる

終、はてはなる。萬葉集（乎波里）

をひ

甥、兄弟の子。和名抄（甥、乎比）

をみなくし

女郎花、草の名。和名抄（女郎花、乎美那閉之）

をめく

叫、うめくよう、うつわる語。（現在）を、をつゝといふ、たぐひ。

をり

時節、とき。その時。日本紀、節字の、古訓による。

をり

檻、猛獸を、こめおく、もの。詩大雅、牢字の古訓による。

をる

居、そこにある。すゑる。萬葉集（乎流）

をしね　晩稲

落合直文氏曰ケおしねと謂ふ説もあれど非なりと
此説は他ノ国文典学者ニモアリ余云亦然リト思フ依テ
之ヲ補フ然シ物集高見氏におしねノ説ニヤ本書ニ
載セラレズ暫ク補記シテ入ク

をの　斧、木をきる、刀。和名抄（斧、乎能）　てをの、釿。木をけづる、斧。和名抄（釿、天乎乃）

をのく　戦慄、おそれふるふ。字鏡（惜、乎乃々久）

をば　伯母、叔母、父の姉。父の妹。和名抄（伯母、乎波）

をちる　終、はてになる。萬葉集（乎波里）

をひ　甥、兄弟の子。和名抄（甥、乎比）

をみなへし　女郎花、草の名。和名抄（女郎花、乎美那閉之）

をめく　叫、うめくよりうつれる語。（現在）を、をいくといふ、たぐひ。

をり　時節、とき。その時。日本紀、節字の、古訓による。

をり　檻、猛獸を、こめおく、もの。詩大雅、牢字の古訓による。

をる　居、そこにあるすゑ。萬葉集（乎流）

をる　折、疊、かゞむ。かゞめて、そる。そこ波の、うちをる、手折、手をもて、折る。萬葉集（乎利）たをり（多乎理）山のたゝめる、處。つゞらをり、九折、山坂のをれめぐれる、處。葛（つゞら）を折りて、のぼりくだりすといふ、意。

をろち　大蛇、大きたる、蛇。古事記（遠呂智）

をゝし　丈選、九折の古訓によるなり。日本紀、雄畧の古訓によるなり。

（をゝる）　花の、さきみちて、たゝらくたゞ。

（あをひえ）　竹刀、兒のほぞのを切る、竹のつゝる。和名抄（竹刀、阿乎比衣）

からをもむし　蟋蟀、虫の名。和名抄（蟋蟀、加乎毛牟之）

かをる　薫、かうばし。字鏡（淑郁、加乎留）

くゝるをがせ）　松蘿、昔の名。和名抄（蘿佐流乎加世）

むらさきにをん　紫苑、草の名。業苑の、字音の假字。

をり　折、道のまがりくねれる、處。枝折をし。

をゝる　萎、撓、呵責、たゝりせめる。

たをやか　嬪妍、たをやめの、たをやかなる、美女、たをやめぶり。萬葉集（之乎礼）和名抄婦人、太平夜米）

（とをむ）　撓、たゝむ。萬葉集（等乎牟）（とをく）たゝくこと。古事記（等遠々）

ひをむし　蟋、虫の名。和名抄（蟋、比乎無之）

くゝるをがせ）　松蘿、昔の名。和名抄（松蘿佐流乎加世）

むらさきにをん　紫苑、草の名。業苑の、字音の假字。

をり　折、道のまがりくねれる、處。枝折をし。

をゝる　萎、撓、呵責、たゝりせめる。

たをやか　嬪妍、たをやめの、たをやかなる、美女、たをやめぶり。萬葉集（之乎礼）和名抄婦人、太平夜米）

（とをむ）　撓、たゝむ。萬葉集（等乎牟）（とをく）たゝくこと。古事記（等遠々）

ひをむし　蟋、虫の名。和名抄（蟋、比乎無之）

くゝるをがせ）　松蘿、昔の名。和名抄（松蘿佐流乎加世）

むらさきにをん　紫苑、草の名。業苑の、字音の假字。

をり　折、道のまがりくねれる、處。枝折をし。

をゝる　萎、撓、呵責、たゝりせめる。

たをやか　嬪妍、たをやめの、たをやかなる、美女、たをやめぶり。萬葉集（之乎礼）和名抄婦人、太平夜米）

（とをむ）　撓、たゝむ。萬葉集（等乎牟）（とをく）たゝくこと。古事記（等遠々）

ひをむし　蟋、虫の名。和名抄（蟋、比乎無之）

まをす まをうす

申、貴き人に、告ぐ。古事記（麻袁須）此假字、音便にてハ、まうす。佛足石歌（麻宇佐牟）

やをら

徐々、しづく。此假字、古書に見えず。今ハ、古言梯の、説による。

（つぎをき）

徘優、をかしき戯、猿樂のたぐひ。日本紀、徘優の、古訓による。

あを

青、藍の色。古事記（阿袁）あをむ、青あをくなる。字鏡（䶵䶵、阿乎美）あをがひ、螺鈿、青貝の意。あをがへる、蝦蟇、虫の名。和名抄（青蝦蟇、阿乎加閉流）あをの り、陟釐、海苔の名。和名抄（陟釐、阿乎乃利）あをひとぐさ、蒼生、日本紀（蒼生、阿烏比等久佐）あをむし、螟蛉、虫の名和名抄（螟蛉、阿乎無之）

（あを）

襖子、衣の名。假字ハ、次の、あをし の例による。あをし、襖子、和名抄（襖子、阿乎之）

いさを

功勲、いさましくをしき、ひざ。世の、ためになる、よきしわざ。日本紀竟宴歌（夷裝烏）いさをし、勇、いさましく、をし。日本紀竟宴歌（伊佐袁志久）

いを うを

魚、水に、すめる、鱗と、鰭とある、いきもの。字鏡（魚、伊乎）古事記（宇袁）とびを、鰩、魚の名飛びいを、の約り。字鏡（鰩刀比乎）ひを、氷魚、魚の名。氷いを、の約り。氷ハひといふ。字鏡（鱦、比乎）たりを、針魚、魚の名。針いを、の約り。和名抄（針魚、波利乎）かつを、堅魚、魚の名。堅うを、の約り。たうを、約れバ、つとなる。和名抄（鰹、加豆乎）しろを、白魚、魚の名。白うを、の、うを省けるなり。すべて、うも、省くことあり。おほうみ（大海）を、おほみ、あをうめ（青梅）を、あをめといふ、たぐひの如し。和名抄（鮑、之呂乎）いをめ、肬、手足にいぐくる、つぶらかなる、かたね。魚目の、こころ。和名抄（肬目、以乎女）

さを

竿、長き竹。和名抄（檇、佐乎）からざを、連枷、稲をうつ、道具、唐竿のこころ。和名抄（連枷、加良佐乎）みざを、水竿、船をつかふ、竿。水みざをの、こころ。

とを

十、數の名。古事記（登袁）

ばせを　芭蕉、草の名。芭蕉の、字音なりとも、いひ、こゝろをみるべし。

みさを　操、志を守るをいふ。靈異記(彌佐乎)

○濁音の假字

じ　この假字ハ、上中下の、さだめなく、いづくまでも、ぢとまぎるゝ。されど、こゝまで、じと書くべき、かぎりをいふなり。此ほかのハ、皆、ぢと書くべしと、こゝろふべし。

じ　不、うちけしの未來の語。ずの、すこしきなり。

じ　痔、病の名。痔の、字音の假字。

あじか　簣、土をいれて、になふもの。和名抄(簣、阿自賀)

あじろ　網代、竹のつぎなどを、くみつらねたるものにて、魚をとる、道具。あみしろ(網代)の約

り。萬葉集(阿自)

あまじし　瘜肉、いぼめの類。あまりじし(餘肉)の約なり。和名抄(瘜肉、阿萬之々)

いちじるし　著、かくれなし。假字ハ、次の、いちじるし、著、かくれなし。いちじるしの、例なり。萬葉集(伊知之路久)

かじく　憔悴、やせほそる。日本紀、憔悴の、古訓による。

(かじる)　呪詛、のろふ。日本紀(呪詛、伽辞離)

かたじけなし　辱、身のほどに、すぎたるもてなしを、はゞかる。釈日本紀(可多自氣奈志)

くじか　麞、獸の名。和名抄(麞、久之加)

くじく　折、をる。きずつく。字鏡(触、久自久)

くじる　抉、突きこみて、ねぢ。字鏡(剜、久自利惠留)

さじき

假庭、物見などの時、すゑるわらに、かまふるもの。次の、さずきのうつわるなり。さずき、假庭、さじきに同じ。古事記（佐受岐）

しじみ

蜆、貝の名。和名抄（蜆貝、之々美加比）

しじむ

縮、短くなりて、ひくつによる。假字ハ、次の、しじまるの例なり。しじまる、縮しじむ（縮、志自万留）しじかむ、縮しじむにおなじ。（しじらき）

縅、しじみとる、絹。和名抄（縅、之々良岐）

たじろく

辟易、たじよひ動く。此假字、古書に見えず。今ハ、和訓栞による。

（つじむ）

瘜、それもの、くれて高くなる。字鏡（靘鼈、阿乎弥豆志牟）

なじる

詰、とかめて、問ふ。字鏡（詰、奈是留）

なまじひ

憖、いさゝかしひて。かくりて。萬葉集（奈麻強）

（にじよぶ）

呻、うめく、靈異記（呻、介士与夫）

にじる

蹂、すりつく。すりつぶす。字鏡（蹂、不弥介志留）

たじかみ

薑、草の名。和名抄（薑、久礼乃波之加美）かはらじかみ、呉茱萸、木の名、和名抄（呉茱萸、加波波之加美）

たじく

彈、撓みの、ある力にて、うつ。字鏡（招、弓波自久）

たじむ

始、新におこす。續日本紀（波自米）たじまる、始、あらたにおこる。假字おなじ。

ひじき

鹿尾菜、海苔の名。次のひずきもの、うつわるなり。ひずきも、鹿尾菜、海菜の名和名抄（鹿尾菜、比須支毛）

ひじり

聖、すぐれてよき、人。清みとる、酒。日本紀竟宴歌（比志理）

ほじし

脯、乾しとる肉。和名抄（脯保之々）

まじなふ

禁厭、祈りて、病をなほす類の、ひざを（まじなの）するをいふ。小右記（万志奈比）厭魅、ひざをおこふる、まじなひ。のろひ。字鏡（蠱、万自物）（まじくる）まじなはれて、あしきみちにいる。祝詞式（麻自許利）

まじり

眦、目の、志り。目ハ、語のかしらにてハ、まといふこと多し。まつげハ、目の毛、まぶこハ、目蓋まなこハ、目の子なり。まなじり、眦、目の、志り。和名抄（眦、萬奈之利）

まじる

交、雜、いりちがふ。ひとつにまじたる、交雜、まじるにおなじ。假字まじ。萬葉集（末自留）まじふ、交、雜、まじたらす。萬葉集（麻自倍）

まじろく

瞑、目、志ぐくうごく。まとこ。さく。字鏡（瞑、万志呂久）

みじかし

短、長くなし。萬葉集（美自可伎）

むじな

狢、獸の名。和名抄（狢、年志奈）

めたじき

茺蔚、草の名。和名抄（茺蔚、米汲之支）

やじり

鏃、箭の、志り。字鏡（鏃、也志利）

あるじ

主人、家の、ぬし。古本風俗歌（阿流之）

あるじ

饗、酒肴をもて、まらうどをもてなすをいふ。されば、假字、主人におなじ。

いみじ

甚、たなたなだし。此假字、古書に見えず。つねに、かく書けり。

うじ

蛆、虫の名。古事記（宇士）

うなじ

項、頸の、うしろ。和名抄（項、宇奈之）

おなじ

同、異なることなし。萬葉集（於奈自）（おやじ）同おなじに同じ。萬葉集（於夜自）

きじ

雉子、鳥の名。和名抄（雉、支之）

くじ

籤、占の、志るしにとるもの。五代帝王物語（孔子）

さじ

すさまじ

つじ

つじ

つむじ

つむじ

とじ

匙、ものを、すくひとる、もの。此假字、古書に見えず。常に、かく書けり。

荒涼、さびし。すごし。そらおそろし。此假字、古書に見えず、常に、かく書けり。

辻、道と道と、いであひたる、ところ。此假字古書に見えず。されども、字鏡に、靘䟽を、阿乎弥豆志牟とよみて、高くなるを、豆志牟といへれど、辻も、豆志の、假字なるべし。つじぎみ、辻君、辻にをる、遊女。つじうら、辻占、辻にてする、占ひ。

躑躅、木の名。假字は、次の、いたつじの、例なり。いたつじ、羊躑躅、一種の、躑躅和名抄(羊躑躅、伊波豆々之)

飆、風なり。まひかぜ。和名抄(飆豆無之加世)

廻毛、牛馬の毛の、まろ〳〵めぐれる、もの。和名抄(廻毛、都無之)

刀自、よそひたかき、女。いへの、ことをとる、女。また、老女をいふ、ほめことば。和名抄(負度之)

いへとじ、家刀自、家の刀自。靈異記(家室、伊戸乃土之)

たちとじ、母刀自、母君。萬葉集(妣刀自)

にじ(ぬじ)

虹、そらにたちて、五色の、輪のごとくみゆる、もの。和名抄(虹、尓之)

ぬじ、虹、にじに、おなじ、萬葉集(弩自)

たじ

櫨、木の名。假字は、次の、たじゆみの、例なり。たじゆみ、櫨弓、櫨にてつくれる、弓。古事記(波士弓)

ひつじ

羊、獸の名。和名抄(羊、比豆之)

未、十二支のうちの、もの。假字おなじ

ふじ

富士、駿河國の、山の名。和名抄(浮志)

むらじ

連、姓の名。萬葉集(武良自)

もじ

文字、文字の、字音の假字

十

ず この假字ハ、上中下の、ひいぐめなく、いづくにても、づにまぎるされば、こゝにハ、ずと書くべき、かぎりをいぐせり。此ほかのも、皆、づと書くべしと、ひきまふべし。

ず　不、うちけしの、現在の、ことば。

ずさ　從者、ともびと。從者の、字音の假字。

（うずまる）　群集、むらがりあつまる。古事記（宇受須麻里）

すぐき　鱸、魚の名。古事記（須受岐）

すぐし　涼、あつきすくなし。萬葉集（須受之）

すぐめ　雀、鳥の名。和名抄（雀須々米）

すぐろ　漫、何となく。おのづから。おぼえず。そぞろと、同語なれバ、假字も、ずなり。

たゝずむ　彷徨、たちやすらふ。そこを離れずて、居る。萬葉集（立住）

なずらふ　準、くらぶ。よそふ。字鏡（準奈須良不）

ねずみ　鼠、獸の名。和名抄（鼠祢須美）

うず　髻華、冠の、かざりにさす、もの。古事記（宇受）

かず　數、多きと、少きとをいふ語。萬葉集（加受）

きず　疵、物につきたる、かけ。萬葉集（幾受）

くず　葛、草の名。和名抄（葛穀久須加豆良乃美）

すゞ　錫、金なりも一種の、金。續日本紀、白鑞の、古訓による。

すゞ　鈴、振りてならす、かね。古事記（須受）

すゞむし、鈴虫、虫の名。すゞの、ねいろになく、虫。假字おなじ。

たゞず　筈、弭（箭の、弦をとゝる、ところ。弓の、弦をかゝる、ところ。和名抄（筈、夜波須。弭、由美波數））

（たねず）　唐棣花（木の名。萬葉集（波称受））

みゝず　蚯蚓（虫の名。和名抄（蚯蚓、美々須））

もず　鵙（鳥の名。和名抄（鵙、毛受））

○音便の假字

音便とは其音の、他の音より、みらびかれ、あるは、響かされたるどして、あらぬ音に、きゝなさるゝをいふ。かと、音便は、中昔のころ、漢語をやはめて、國語の如く、呼びなしたりしより、起りしなるべし。困を、こう（ずと呼び、執念を、しふねしと呼ぶる、たぐひ多し。）たとへば、さきはひ（幸福）の（さいはひ）ときこえ、きをいと聞く。かくし（篇子）の（かうし）ときこゆるくをうと聞く。たぐひをいふ。

音便の假字は、いと、うとなり。但し、今ひとつ、ゆといふあり。十三にいふべし。たとへば、かとの音は、きしなれども、音便にては、皆いと書き、もとの音は、かくもひふへほまみむりゐをなれども、音便にては、皆、うと書く、たぐひの如し。次の例を見て、ときまふべし。

い

きを、いと書くべき例。

ききき（皇后）を、きさい。

さきぐさ（三枝）をさいぐさ

さきたま（埼玉）を、さいたま

さきなむ（呵責）を、さいなむ

しをいと書くべき例。

さきはひ（幸福）を、さいはひ

すきがき（透垣）を、すいがき

つきたち（朔）を、ついたち

つきたて（衝立）を、ついたて

あした 朝を、あいた

くし 串を、くい。

ゑぐし 醯を、ゑぐい。

か を、うと書くべき、例。

かぶり 冠を、かうぶり

く を、うと書くべき、例。

かくし 簡子を、かうし

さくし 冊子をさうし

ひらぐつ 葉舄を、ひらうづ

ゑぐし 醯を、ゑぐう。

ひてなし 饗應を、ひてない。

ひくし 私をひくい。

熱 寒 遠 近 親 疎 長 短 のたぐひ、皆おなじ。

ひやくし 拍子を、ひやうし

ぞく 族を、ぞう。

やうやく 漸をやうやう。

熱く 寒く 遠く 近く 親く 疎く 長く 短く のたぐひ、皆おなじ。

た を、うと書くべき、例

かたたう 華堂を、かうだう

かたたけ 皮茸を、かうたけ

かたほり 蝙蝠を、かうぼり

ひ を、うと書くべき、例。

あづまびと 東人を、あづまうど

いもびと 妹人を、いもうと

おとひと 弟人を、おとうと

かたびと 方人を、かたうど

ゐなかびと 田舍人を、ゐなかうど

たくき 箒を、たうき

ふきがた 鞴を、ふいがう。

こまびと 高麗人を、こまうど

せびと 兄人を、せうと

やまびと 仙人を、やまうど

まらびと 稀人を、まらうど

ふ を、ぅと書くべき例。

ほふし 法師 を、ほうし

へ を、ぅと書くべき、例。

まへつきみ 卿 を、まうちぎみ

ほ を、ぅと書くべき、例。

なほし 直衣 を、なうし

ま を、ぅと書くべき例

たまはり 賜 を、たうばり

み を、ぅと書くべき、例

かみがき 髪掻 を、かうがい

さふらふ 候 を、さうらふ

つかへまつる 仕 を、つかうまつる

なほらひ 直會 を、なうらひ

こみち 小路 を、こうぢ

かみつけ 上野 かうつけ

かみべ 神戸 を、かうべ

む を、ぅと書くべき、例。

かむなぎ 巫 を、かうなぎ

かむし 柑子 を、かうじ

り を、ぅと書くべき、例。

とりで 取出 を、とうで

ゐ を、うと書くべき、例。

まゐで 參出 を、まうで

を を、ぅと書くべき例。

てみづ 手水 を、てうづ

たむけ 手向 を、たうげ

ひむか 日向 を、ひうが

まをす申を、まうす

○長聲の音便

長聲の音便とハ、音を、長くひきて、呼ぶために、いでくる響をいふさて、其響の假字にもいと、うとを用ふ。たとへバ、詩歌ハ志かなるを其志を、長くひきて、呼ぶに、志ゐか、志ゐか、志ひかの如く響くにそ志いかと書き、（なほ、志じ（四時）を、志いじ、けし（家司）を、けいしと書く、たぐひ）八日ハ、やかなるを、其やを長くひきて呼ぶに、やうか、やおか、やをかの如く響くにそ、やうかと書く。（なほ、さくわん（佐官）を、さうくわん、にしよくわん（女官）を、にようくわん、たぶ（賜）を、たうぶ、まく（設）を、まうく、よきり（夜）を、ようさり、ほご（反故）を、ほうごと書く、たぐひ。）まく、この長聲にそゆといふをも、用ふることあり。六日ハ、むかなるを、むゆかと呼びて（今ハ、むゆかをむいかの如く呼びなせり。）ゆといふ、聲をそらるも音便なり。

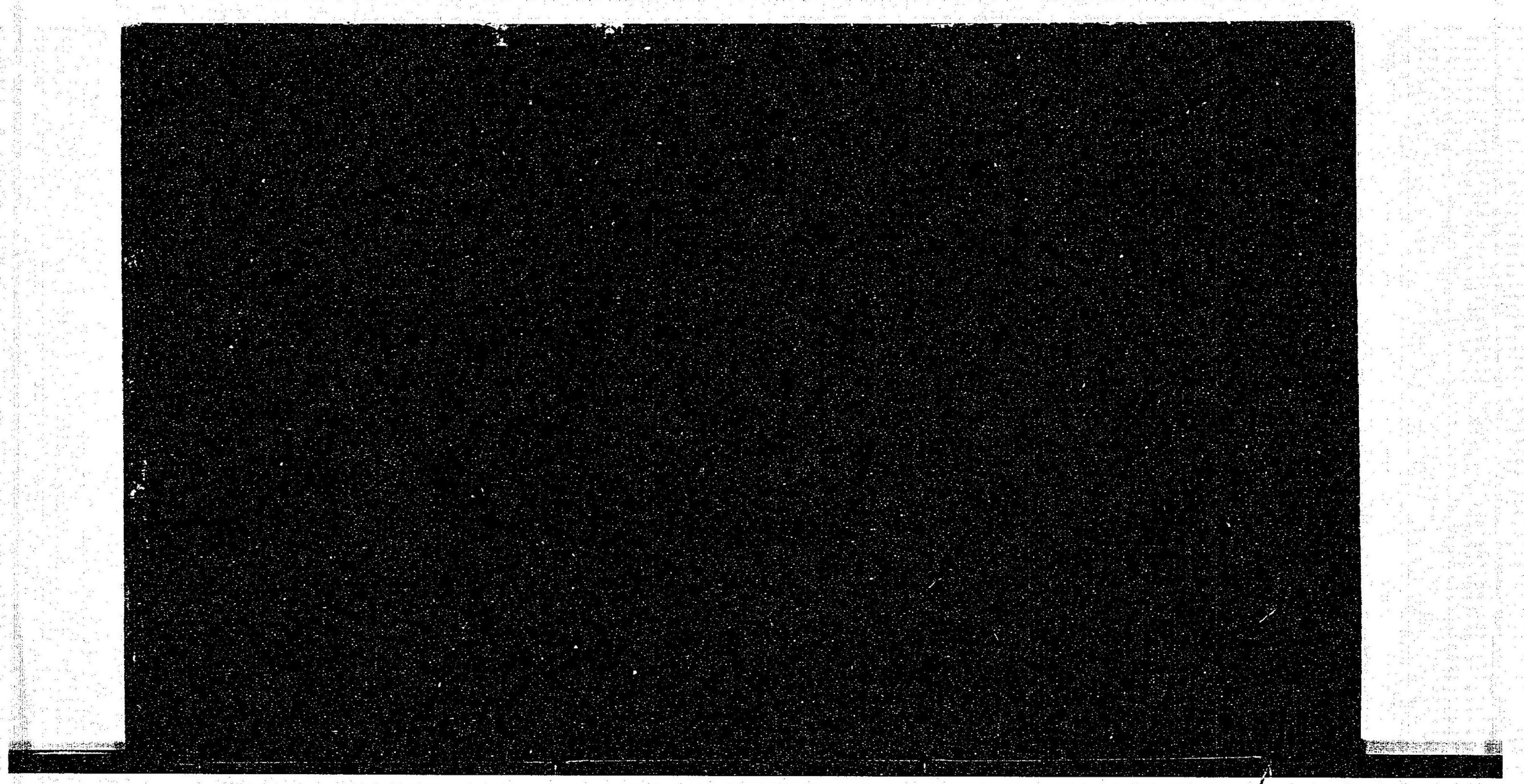
かなつかひ教科書終

明治十九年三月三日版權免許
明治十九年四月十二日出版
明治廿四年一月二日再版

定價金拾貳錢

著者　物集高見
東京本郷區弓町二丁目廿八番地

發行兼所有者　長谷部仲彦
京橋區築地一丁目九番地

印刷兼發兌元　弦巻商店
京橋區南傳馬町一丁目十三番地

版權所有